

令和 4 年 度

---

---

小 論 文

---

---

10 : 00 ~ 11 : 30

地 域 社 会 学 科  
学 校 推 薦 型 選 抜 ( 一 般 )

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら、受験番号を解答用紙の指定欄に記入しなさい。
3. この冊子は1～7ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見い出した場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚あります。1枚は清書用、もう1枚は下書き用です。提出は清書用1枚だけです。
5. 解答は必ず解答用紙の指定欄に横書きで書きなさい。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いてください。
7. この冊子と下書き用の解答用紙は、持ち帰ってさしつかえありません。

**設問** 以下の課題文をよく読んだうえで、後の問いに答えなさい。なお、問いで指定された字数はいずれも句読点やカッコを含む字数です。

**【課題文】**

太古の時代から、食事のあり方は食の性質や食べる人の社会的な条件によって決まってきた。すなわち、誰が何をどのように食べ、食べながら誰と何を話し、いかに権力を分配するかである。これらすべてのことは本質的に関連している。

ヒトが言語を習得するはるか以前には、食事のための時間というものではなく、見つけたものをすぐに生で食べていた。そして、次第に太陽の動きに応じて決まった時間に食べるようになった。とくに定住化するようになってからは、食事は、会話を交わし、言語を発達させ、文化を築き、社会と権力を構造化し、家族、企業、都市、国家、帝国を管理するためのおもな場であった。

しばらくすると、定住民の食生活はまたしても食事から遠ざかった。昼食の時間に帰宅できない人々に携帯食が提供された。次に、ファストフードが登場し、会話のための時間は減った。現在では、太古の時代で暮らしたノマド<sup>①</sup>の食習慣へと逆戻りした。すなわち、独りで立ったまま、時間と場所に関係なく、もち運びしやすい食物を食べるようになったのである。

食事をする機会が失われると、会話はなくなり、静けさが場を支配する。これは社会に甚大な影響をおよぼす。

こうした傾向は世界的なものであり、今後も続くだろう。ただし、その中でも地理的、文化的な違いは残りそうだ。とりわけ、フランスはまだしばらくの間は特殊な国であり続けるかもしれない。

(中略)

忙しく、味覚をもたず、調理できない消費者向けに、いつでもどこでも食べられるさまざまな形態の完全調理済みの食がさらに発展するだろう。

こうした消費者は、誰かとともに食事するのではなく、食べる以外のことを行ないながら食べる。機内食風の食事はすでにそうした兆候を表している。機内食風以外に

も、個食ができ、服を汚さずに立ったままで食卓がなくても食することができる加工形態が登場しそうだ。

このような目的を満たすために、粉末状および液体状の食品が普及するだろう。同様の食品は食餌療法や医療上の目的からすでに存在するが、今後は、固形食を一時的に補完する食品として提供されるようになりそうだ。その後、固形食ではなく、これらの食品だけを毎日摂取すべきだと論ず者たちが現れるかもしれない。

こうした食品はすべて、「スマートフード」という食欲をそそる宣伝文句で紹介されるのではないか。

たとえば、ソイレント社(アメリカ)、フィード社(フランス)、ピタライン社(フランス)、ベルトラント社(ドイツ)、ヒュール社(イギリス)などの企業は、粉末状の完全栄養食など、さまざまな形態の食品をすでに提供している。これらの企業は、気味悪そうに見える自社の食品を、グルテンフリー、完全菜食主義、オーガニックなどに基づく食餌療法だと喧伝することによって、消費者にアピールしている。

(中略)

食卓の周りの椅子に座ろうが、敷かれたむしろに座ろうが、食べるという行為は、身体だけでなく精神も養う。現在の傾向が続くと、会食は、時間の共有、懇親、意見交換、共通の認識の形成という役割を失いそうだ。人類史において5000年以上続いてきた会食という社交の場は消え去り、個食化はこれまで以上に進行するだろう。

②  
最初になくなるのは朝食だろう。各自がその日のスケジュールに応じた好き勝手な時間に冷蔵庫から食べ物を取り出して朝食をとるようになるのだ。

次に、昼食がなくなるだろう。職場においても社員食堂は廃止され、従業員は各自の持ち場で弁当を食べるようになる。

そして、家族で食べる夕食がなくなる。これと同時に、家族は崩壊するだろう。独り暮らしなら、少なくとも夜は個食だ。

食事を誰かとともにする場合であっても、各自は各々のペースで食べるようになるだろう。大皿料理を分かち合う機会はますます減る。誰もが栄養士のように自身の献立を作成するようになるのだ。

人々は決まった時間や場所で食べなくなり、これまで以上に早食いするようになるだろう。仕事中、観劇中、乗り物での移動中、(まだ歩く習慣があれば)歩行中に食べるのだ。

食べ物をちびりちびりとかじる習慣は、ますます顕著になりそうだ。食事は、本来は食べるための場所でないところ(公共のスペース、スタジアム、廊下、列車や車の中など)で、人々が食べ物をついばみ、飲み物を流し込み、せわしなく立ち去る時間になっていくだろう。

人々が公共交通機関で長い時間を過ごすようになると、駅の構内、列車内、地下鉄内の自販機などの形で、食品を販売するための新たな手段が発達していく。われわれは、将来的には自動運転車の車内で食べるようになり、その車内には冷蔵庫などが完備されるだろう。

食は娯楽よりも地位の低い、あるいは娯楽と結び付いた付随的な行為になっていく。

資本主義によって押し付けられたアングロ・サクソン型の発想の下では、食は楽しみという概念の入り込む余地のない、実務的な行為になる。唯一の楽しみは、工業生産される、脂肪と砂糖がたっぷりの模造食品という形でもたらされる。この食事観が勝利を収めれば、悲惨な結果が訪れる。会話、自然との触れ合い、自己表現、議論、合意の形成にとって最適な場が消滅するからだ。そうなれば、われわれは、社会的、精神的にきわめていびつな状況に陥る。

家族での食事が消滅すると、とくに子供の教育に深刻な影響がおよぶだろう。というのは、これまで子供は食事中に、大人の意見を聞き、大人と議論し、思考力を養い、家族や社会の一員になる、あるいは大人たちに反抗する術を学んできたからだ。

人々が集う食事のうち、存続するのはクリスマスや感謝祭など、ごく一部のものだけだろう。より一般化して言うなら、宗教行事や家族の行事、結婚式、誕生祝い、葬式のときの会食である。会食の機会が減るほどに、われわれはその重要性をより強く認識することになるだろう。

社会はますますノマドの群れになっていきそうだ。孤独で自己愛に満ち、必然的に他者と争いを起こす(あるいはそうならないために引きこもる)ノマドは、ソーシャルネットワーク上に映し出される自己のイメージに酔いしれ、そこで自己の嗜好(好き

な料理の写真もその一例だ)、不満、欲望を他者と分かち合うだろう。しかもその行為は、よりによって独りで食事をしながら行なわれるのだ。

未来のノマドは、おもに糖분을摂取しながら暮らすことで、孤独を満たそうとする。というのは、われわれは孤独感からアルコールや薬物に手を出しやすくなるのと同様に、脂肪分や糖分の高い食品をもっと食べたくなるからだ。

孤独感を糖分によって癒やすという傾向はさらに鮮明になるだろう。社会的に排除されているという感覚が生じると、苦痛を感じる脳の部位が活発化する。すると、これを緩和させたいという欲求が生じる。すなわち、糖分が欲しくなるのだ。糖분을摂取すると、脳は気分働きかけて幸福感をもたらす神経伝達物質であるドーパミンを分泌する。これまでの研究からは、非常に甘い食品を摂取したときの脳の反応は、コカインなどの薬物を摂取した後に生じる反応と似ていることがわかっている。

フランスをはじめとする一部の国々は、個食の点においても、当面の間は例外であり続けるだろう。これらの国々では食事の時間、とくに夕食は保たれるはずだ。もっとも、2008年にフランス国立統計経済研究所(INSEE)が発表した2030年の未来予測によると、フランスの世帯の40%は単身世帯、すなわち個食する人々になるという。

友人、隣人、あるいはSNSを通じて集まった未知の人々と会食する機会を設けることにより、個食化に抗う者たちも現れるかもしれない。彼らは孤独にならないために宴会を開くのだ。食物が人工的なものであろうが自然なものであろうが、会食するのである。

市場経済の社会において生じる苦悩を解消するために推奨される行為は、会話や美食を楽しむことではなく、自身の健康、そしてそれが食によっていかに脅かされているのかを注視することである。

よって、体重、ボディマス指数(BMI)、健康に関するさまざまな変数に対して食生活がおよぼす影響を監視するための手段が提供されるようになるだろう。

次は、自身の健康状態に見合った食生活が課せられる。誰もが自分は自由に食物を選択できると考えるが、実は他者から課せられた規範に従うだけなのだ。2030年ごろには、個人的および社会的に食べるべきものを明確にするために、個人の遺伝的な特性も第三者に把握されるようになるかもしれない。

私は、かなり以前から超監視型社会の到来に警鐘を鳴らしてきた。そうした社会が、個人の健康状態をはじめとする領域に定着しつつある。超監視型社会では、公的および私的な各種団体が個人を監視する。これらの団体は、個人の読書、音楽、映画の好み、思想、食べ物や飲み物の嗜好を把握しようとする。その目的は、より各人に合ったものを、より多く販売するためであり、各人の健康リスクを正確に評価するためであり、社会秩序を最適に管理するためである。

このような世界では、最高の価値は、個人の活力や嗜好ではなく、情報および情報を測定するデータに宿る。食習慣のデータ管理は必須になるだろう。

したがって、猛威を振るうデジタル化の波が、保護されると思われていた食の領域を覆い尽くすことになるかもしれない。

超監視型の次は、各自が自分自身で自己を監視する自己監視型社会に移行しそうだ。自己監視型社会の目的は、予測に基づく統計分析によって定められた規範に自身を適合させることだ。こうした自己監視はすでに見られる。その先駆けは、暴君のような食餌療法を自らに課して自虐的な快楽を得る行為だ。自己監視を強化するための武器となるのが人工知能(AI)だ。AIは、己の食習慣が規範に適合しているかを、われわれが正しく検証するための手段になるだろう。というよりも、推奨されている物事をAIがわれわれに課すのだ。

ノマド・グッズと家庭用機器が自己監視の道具になるだろう。たとえば、インターネットに接続された腕時計が血糖値と血圧を常時計測し、「この時間にそのような食物を食べてはいけない」などのアドバイスを発するという具合だ。医師や保険会社は、インターネットに接続された冷蔵庫を利用して在庫状況を把握し、自分たちが課す食餌療法に見合う食物を摂取するように指導するだろう。GAFA(グーグル社、アマゾン社、フェイスブック社、アップル社)などのデータを管理する企業と業務提携する保険会社は、冷蔵庫や腕時計から得られる個人データに基づいて決定される食物を食べない被保険者に対し、保険金の支払いを拒否するかもしれない。

その結果、われわれは死という恐怖に怯えて人工物を食らうロボットのような存在になるだろう。この物静かなロボットは、仕事や決まった娯楽のときを除いて話し相手をもたず、会話の最も素晴らしい話題である食も、議論の最良の場である会食の機会も失う。

われわれは沈黙の監視型社会で暮らすことになるだろう。長寿を約束する独裁者に<sup>③</sup>身を委ねるのである。長寿の対価として、われわれは、話す、聞く、意見を交わす、感情を抱く、愛する、楽しむ、叫ぶ、苦しむ、背くなどの、本当に生きるという行為を断念しなければならない。沈黙の監視型社会では、あらゆることが禁じられるのだ。

沈黙の監視型社会においては、個人、そして人類全体にとって最悪の事態へと向かう進行を止めることができない。監視の下で押し黙って暮らす人類は、沈黙に包まれて死ぬだろう。この沈黙が人類を抹殺するのだ。

(中略)

これは耐え難い未来だ。一部の人々はこうした未来が悲惨なものであることを理解している。というのは、すでに多くの人々がこのような悲惨な暮らしを送っているからだ。未来を予測して鳴り響く警鐘に、人々は反応し、怒り、拒絶し、反逆する。すでにそのような動きがある。

何の行動も起こさなければ、食をめぐる激しい暴動が勃発するだろう。それは過去にファストフードのレストランを破壊したり、一部の食肉処理場や多国籍企業に抗議運動を起こしたりした暴動の規模をはるかに上回るはずだ。

一部の先進国では、ボイコット運動、食品工場の破壊、食品会社に対する糾弾、食肉処理場に対する大規模な攻撃がまもなく始まる(すでに始まっている)。

会食の消滅によって失われた話し合いの機会を補うために、議論のための新たな機会が求められる(すでに求められている)。フランスで2018年の秋から冬にかけて起きた暴動(政府に対する抗議活動「黄色いベスト運動」のこと)は、議論の場が失われたことの最も直接的な表現だ。だからこそ、自宅で家族としゃべる機会が失われたことを補うために、円形交差点に建てられた掘立小屋で、見ず知らずの人たちと会話する機会が設けられたのだ。

民主主義にとって、より多くのモノを売らんとし、資本主義が人々を沈黙に追い込むのを放置すること以上に危険な行為はない。

人々の復讐は、世界をよくも悪くもする。

怒りを行動に変えるのなら、世界をよくすべきだ。われわれの食生活、食糧生産の方式、議論の形態を見直すべきなのだ。

なぜなら、与えられる生活の糧が耐え難いものになると、誰であろうと革命を起こすことになるからだ。

※ノマド(nomad)とは遊牧民、放浪者を意味する。

(出典：ジャック・アタリ著，林昌宏訳『食の歴史』プレジデント社，2020年。出題に際し原文の一部を改変した。)

**問 1** 下線部①で筆者が述べている「現在では、太古の時代で暮らしたノマドの食習慣へと逆戻りした」とはどのような意味か。課題文の記述を踏まえて説明しなさい。(100字以内)

**問 2** 下線部②で筆者は「会食という社交の場は消え去り、個食化はこれまで以上に進行するだろう」と述べているが、個食化が進行することによって社会で深刻化する問題とは何か。課題文の記述を踏まえて説明しなさい。(100字以内)

**問 3** 下線部③で筆者が述べている「われわれは沈黙の監視型社会で暮らすことになるだろう」とはどのようなことか、課題文の記述を踏まえて説明しなさい。そのうえで、このことについて、あなたの考えを具体的に述べなさい。(600字以内)